

研究区分	教員特別研究推進（地域振興）
------	----------------

研究テーマ	オノマトペをつかった身体的表現とそれらの教育的含意 ——SPAC 俳優による演劇ワークショップをとおして				
研究組織	代 表 者	所属・職名	言語コミュニケーション研究センター・教授	氏名	藤森 敦之
	研究協力者	所属・職名	順天堂大学・准教授	氏名	小田 透
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発 表 者	所属・職名	言語コミュニケーション研究センター・教授	氏名	藤森 敦之

講演題目
言語学・文学・演劇の協働による地域連携型ワークショップの実践 —SPAC との連携による「オノマトペのふしぎ」の開催をとおして—
研究の目的、成果及び今後の展望
教員特別研究推進費の支援を受けた本事業では、地域振興に資する活動として、SPAC-静岡県舞台芸術センターとの連携により、「コトバを感じる・動かすワークショップーオノマトペのふしぎー」を開催した。本企画は、言語コミュニケーション研究センターと SPAC の協働により、日常的に使用される日本語のオノマトペを、言語学・文学・演劇・身体表現の観点から多角的に捉え直すことを目的としたものである。本ワークショップは「さらさら」「ざわざわ」「どしん」など、普段何気なく用いているコトバの響きを手がかりに、日本語の不思議さや面白さを体験的に学ぶ企画として実施した。 当日は、高校生以上を対象に、10 代から 70 代まで幅広い年齢層の参加者が集まり、留学生、日本語講師、音楽家、公務員、県外からの参加者など、多様な背景をもつ方々が参加した。演劇経験や専門知識は問わず、「ことばが好き」「身体で表現するのが好き」「日本語の不思議に興味がある」といった参加者を広く受け入れたことにより、大学の専門知を地域社会へ開く場としての意義を持つ活動となった。 ワークショップでは、午前に「コトバの音と身体をつなぐ」活動を行い、言語学の観点からオノマトペの音象徴性や意味の広がりについてミニレクチャーを実施した。その後、参加者はオノマトペを音や身体運動で表す活動に取り組み、言語表現が身体感覚や動作とどのように結びつくのかを体験的に理解した。午後には、文学作品やマンガに見られるオノマトペの機能を確認したうえで、オノマトペかるたや新たなオノマトペ表現の創作、さらにオノマトペを中心とした短いシーンづくりに挑戦した。 本企画の成果は、第一に、言語研究の知見を地域の参加者にわかりやすく還元できた点にある。オノマトペは日本語学習者にとって理解が難しい一方、日本語母語話者にとっても無意識的に使用している表現である。参加者は、音と意味の対応、感情や動きの表現、文脈によるニュアンスの違いなどを意識化することで、日本語の豊かさを発見する機会を得た。第二に、演劇的手法を取り入れることで、言語を知識として学ぶだけでなく、声・身体・リズム・空間を通して体験的に理解する学びを実現できた。頭と体を同時に用いる活動は、参加者にとって新鮮な経験であり、終了後の振り返りでは、それぞれの気づきや感想を表現豊かに共有する姿が見られた。第三に、本事業は、大学と地域文化機関との連携による新たな地域貢献モデルを示した点でも意義深い。SPAC の俳優、舞台音楽家、大学教員がそれぞれの専門性を持ち寄ることで、単独の講義や演劇ワークショップでは実現しにくい、学際的かつ参加型の学びの場が形成された。終了後には、SPAC 関係者からも「新たな協働のあり方を学ぶ機会となった。今後も継続的にいきたい」との好意的なコメントが寄せられた。 本企画は、日本語オノマトペを題材として、言語学・文学・演劇を横断する学びを地域に提供し、参加者の日本語への関心を高めるとともに、大学と地域文化機関の協働可能性を具体的に示す成果を上げた。今後は、今回得られた参加者の反応や実施上の知見を踏まえ、留学生向け日本語教育、地域住民向け公開講座、教員研修、演劇教育との接続などへ発展させることで、継続的な地域振興・文化振興に資する取り組みとして展開していきたい。